

# いしかわの遺跡

No.  
54  
2017.3.17

## 水田の下から古墳!



方墳 (中央) と方形周溝墓 (方墳の両側)

北陸新幹線建設(金沢・敦賀間)にともなう発掘調査で、加賀市弓波遺跡から古墳が発見されました。耕地整理などにより墳丘が削られ存在が知られていなかったものです。埋葬施設は残っておらず周溝のみ確認されたもので、古墳時代中期に造られた一辺 23 m の方墳であることがわかりました。

調査では弥生時代後期の方形周溝墓や木棺墓、古墳時代後期の円墳も確認されており、調査区一帯が弥生時代後期から古墳時代後期まで墓が集中する場所であったことが明らかになりました。



木棺墓

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477

FAX 076-229-3731

E-mail ● mail@ishikawa-maibun.or.jp ホームページ ● 「いしかわの遺跡」で検索 (<http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>)

H28  
発掘調査

ゆみなみいせき (かがし)  
弓波遺跡 (加賀市)

弓波遺跡は、加賀市弓波町から八日市町にかけて位置しており、柴山潟に流れ込む八日市川と尾俣川の合流部周辺に広がっています。3万㎡を超える大規模な発掘調査により、弥生時代から室町時代まで続く複合遺跡が明らかになりました。北側には、古墳時代中期の富塚丸山古墳や白鳳期の創建とされる弓波廃寺があり、これらとの関連が注目されます。

**弥生・古墳時代の集落** 弥生時代後期から古墳時代前期頃の掘立柱建物、平地建物（地面を掘りくぼめずに柱を立てた建物で、周囲に溝をもつもの）や井戸などを確認し、土器や石器、木製品などが多く出土しました。掘立柱建物のなかには平行する溝を掘って中に柱を立てた布掘建物も見られます。

**方形区画溝** 弥生時代後期から古墳時代前期頃の方形区画溝2基を確認しました。東西に並んでおり、東側の区画溝（一辺 25 m）が埋まったあとに西側の区画溝（一辺 26 m）が掘られています。いずれも陸橋状の出入口をもっており、東側区画溝では北辺中央、西側区画溝では西辺中央と北辺の2ヶ所に設けられています。

**墳墓** 弥生時代後期の方形周溝墓2基や木棺墓、古墳時代中期後半の方墳1基、同後期の円墳1基を確認しました。古墳の墳丘は削られていましたが、円墳の周溝からは土器や須恵質の埴輪などが出土しました。

**中世の道路状遺構** 室町時代につくられた道路状遺構を確認しました。路面は砂利で整地されており、両側の側溝からは、土器や陶磁器、石製品とともに弓波廃寺と同型の軒丸瓦や銅銭、石造物などが出土しました。



調査区とその周辺 (南から)



布掘建物 (弥生時代後期)



井戸 (弥生時代後期)



円墳 (古墳時代後期)



円墳周溝の須恵器 (古墳時代後期)



ゆみなみいせき (かがし) 弓波遺跡 (加賀市)



方形区画溝 (弥生時代後期～古墳時代前期)



細い水路 (弥生時代後期)



掘立柱建物群 (古墳時代末～奈良時代初め)



船材を転用した井戸 (平安時代)



弓波廃寺と同型の軒丸瓦 (白鳳期)



道路状遺構 (室町時代)

H28  
発掘調査

ゆみなみいせき (かがし)  
弓波遺跡 (加賀市)

**石製品製作地点** 弥生時代後期から古墳時代前期にかけての石製品の製作地点を確認しました。碧玉（緑色凝灰岩）製の管玉未成品（製作途中のもの）や蛋白石（オパール）製の勾玉未成品とともに、碧玉原石を割った破片（出土総重量 80kg 以上）や蛋白石、紫水晶、瑪瑙、頁岩などの破片が出土しました。これまで北側約 1km にある片山津玉造遺跡が古墳時代前期の碧玉製品製作遺跡として知られていましたが、今回の弓波遺跡の発見によって、江沼地域における石製品生産の開始時期が、弥生時代後期にさかのぼることがわかりました。

玉製品製作地点の近くからは、接続して掘られた土坑群が見つかりました。土坑は場所を少しずつずらしながら、地下の粘土層まで深く掘られています。土器づくり用の粘土を採掘した土坑の可能性があり、埋めた時にまとめて廃棄されたと考えられる弥生時代後期の土器や碧玉の破片が多く出土しています。



建て替えが見られる平地建物群 (弥生時代後期)



円形の平地建物 (弥生時代後期)



粘土採掘坑と考えられる土坑群 (弥生時代後期)



方形の平地建物 (弥生時代後期)



土坑に棄てられた土器 (弥生時代後期)



玉づくりに関連する石製品 (弥生時代後期～古墳時代前期)



## 古代体験まつり

平成 28 年 10 月 9 日 (日)、「第 18 回古代体験まつり」を開催し、家族連れを中心とする 1,200 人の来場者でにぎわいました。

オープニングイベントでは、大王と王子にふんじた体験者が、採火のあと、まつりの開会宣言をおこない、22 のコーナーで体験がスタートしました。

「狩人の森」で獲物に矢を放つ親子や「サトイモ収穫」、「土版づくり」にチャレンジする小学生など、会場のあちこちでにぎやかな声が聞かれました。数年ぶりに復活した「草木染め」は、布を茜で染めるもので、体験者はオリジナルのハンカチを仕上げていました。また、普段見ることがない書道パフォーマンスでは「古代甕」の大書が完成すると、大きな歓声が上がりました。

どの体験コーナーも終日にぎわいを見せていましたが、とりわけ、「スタンプラリー」「狩人の森」「まが玉づくり」が人気で、「火おこし」「組みひもづくり」「クルミ割り」なども好評を得ました。



採火して開会を宣言



縄文弓矢「狩人の森」



古代衣装の試着



草木染め



まが玉づくり



サトイモの収穫



土版づくり



木簡づくり



書道パフォーマンス



## 講座 考古学最前線 「古代人を魅了した色」

平成 28 年 11 月 26 日(土)、石川県立美術館ホールを会場に、京都美術工芸大学の村上隆教授を講師に迎え、材料科学や成分分析などの面から歴史に迫る最新の考古学研究について、わかりやすく解説していただきました。

作られた当時と変わってしまった出土品の色を探る科学的な分析方法や、古代人が大切にしたい“赤”を作り出すために使われたベンガラや水銀朱などの顔料の分析例が紹介されました。また、考古学による銅鐸の形態分類と素材分析によって得られた製作時の発色や音などが一致する例も示され、「新しい切り口からの説明に面白さを感じた」という声が聞かれました。江戸時代の棹銅の分析例では、錆び防止のために熱した銅を水中に入れ、酸化銅とする加工法により結果的に表面が赤く見えていたことなど、これまで知られていなかった近世の金工技術も紹介されました。「三角縁神獣鏡の魔鏡現象の話にわくわくした」との感想もあり、歴史系の講演会ではなかなか聴くことができない、科学的手法を利用して歴史を解明していくお話に、多くの参加者が魅了されたようでした。



講演する村上隆教授

また、当日は村上教授の講演に先立って当センターの藤田邦雄調査部長が「考古資料から見た九谷焼の“色”」と題する報告をしました。陶磁器の色や原料に興味のある参加者からいくつも質問が出され、関心の高さがうかがわれました。



## 「鳥形はにわづくり」

平成 29 年の干支である「酉」に関連して、「鳥形はにわづくり」を平成 29 年 1 月 29 日(日)に行い、小学生から大人まで 15 人が参加しました。

鳥形埴輪には鶏や水鳥、鷹などの種類があります。このうち、最初に出現し、最も多くつくられたのが鶏形で、鶏は古墳における儀礼の中でも特に重要視されていたようです。石川県では、加賀市吸坂丸山 2 号墳から鶏形の土製品が出土しています。

はにわの製作は、粘土を用いて以下の順で行いました。①尾羽の製作、②基台の輪積み、③胴部の製作、④胴部と尾羽の接合、⑤頭部の仕上げ、⑥羽と胴部の接合です。完成までに胴部と尾羽の接合など難しい工程もありましたが、鳥形はにわについて理解を深めていただきました。

作品は乾燥、焼成を行い 2 月 18 日(土)より本館ホールで展示・引渡しを行いました。



製作風景



本館ホールでの展示

H28  
古代  
体験

## 古代体験学習講座「縄文狩人体験」

平成28年12月4日(日)に、古代体験学習講座「縄文狩人体験」を開催しました。この講座では、狩りの道具が檜から弓矢へと発達したことを学び、矢づくり、矢の試射、鹿の角を使ったアクセサリーづくりなどを体験しました。

矢づくりでは、黒曜石を鹿の角の先で整形して鋭い石鏃に仕上げ、矢竹の先端に固定しました。ついで、3枚の羽根を切りそろえ、接着剤と紐で矢竹に固定し矢を完成させました。試射では、製作した3本の矢を鹿や熊の的に向かって放ちました。

さらに、狩りで得た動物の利用法を学ぶために、鹿の角を材料としてアクセサリーづくりを行いました。角の表面を水でぬらしながら砥石で削り、小型のノミで形を整えました。表面に縄文土器などを参考にした文様を刻み、孔に紐を通して完成です。

石鏃や矢の製作、さらに鹿の角を使った装身具づくりは、狩りを生業とした縄文人が備えていたワザで、この講座は、縄文人の技術の高さや生活に触れる絶好の機会になりました。



弓矢の歴史や作り方を学ぶ



矢づくり



鹿の角でアクセサリーづくり



動物の的に射る

## 収蔵品ギャラリー

当センターが保管している出土品のなかから、選りすぐりの収蔵品をご紹介します。  
今回は、金沢市街地の西、日本海近くにある畝田・寺中遺跡から出た墨書土器です。

### 収蔵品No.27 墨書土器「津」<sup>つ</sup>「津司」<sup>つのつかさ</sup> —金沢市畝田・寺中遺跡—

須恵器の杯や蓋に墨で書かれたもので、「津」が20点、「津司」が4点発掘されています。「津」は9世紀前半、「津司」は9世紀中葉の時期と思われます。

「津」は、船が停泊する水域と物資の管理施設を指すもので、「津司」は、これらを統括する役所や役人を意味するのではないかと考えられます。

古代の史料（『延喜式』など）には、北陸道の津として、能登の鹿嶋津<sup>かしまづ</sup>、越前の敦賀津<sup>つるがづ</sup>などが見えますが、ここに紹介した墨書土器は、北加賀の犀川河口域にも津が存在したことを物語っています。なお、「津」墨書土器は、金沢市戸水<sup>とみず</sup>C遺跡からも9世紀末から10世紀のものが10点出ており、大野川河口域にも港湾施設が置かれたことが推測できます。

〔関連報告書〕

（財）石川県埋蔵文化財センター 2006『畝田西遺跡群』 = 「津司」1点、「津」20点。

金沢市 2010『畝田・寺中遺跡VI』 = 「津司」3点。



墨書土器「津」と「津司」(中央)